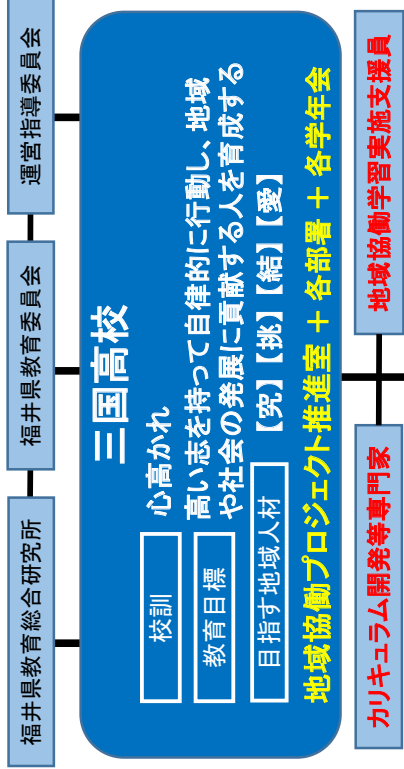


「あったらいいね」をカタチにする！ ～シビックプライドを持ったコミュニティデザイナーを育てる～

【研究開発の目的】

地域にある**資源を活用して地域活性化**に資するプロジェクトを**地域人材と協働**で実施することを通して、**当事者意識**を持って地域の**未来を創造**することのできる人材を育成する**実践的な探究学習**のためのカリキュラムを開発する。



<地域協働プロジェクトコンソーシアム>

福井大学	福井県立大学	福井工業大学
仁愛女子短期大学	アールデザインセンター坂井 東京大学、東京都市大学	坂井市役所 県内自治体
県内高校 課題解決型学習モデル開発校	坂井市議会	坂井あわら ふるさと創造 推進協議会
県外高校 熱海高校 和気開谷高校 他	坂井あわら ふるさと創造 推進協議会	坂井市各地区 まちづくり 協議会
坂井市内 各中学校	エシカル 協会	地域内企業 IIOPロテュース
三国高校 PTA	三国高校 同窓会	第一ビニール シプロ化成 ルネッサ 東武トップツアーズ 他

令和2年度の生徒数
(本事業は全校生徒対象)

学科	1年	2年	3年	計
普通科	137	146	148	431

【本事業における具体的な取り組み】

- 地域協働プロジェクトを推進**
三国高校生が地域人材と協働して、地域活性化のために活動
- 地域協働協議会『ワクワク未来考場』の実施**
コンソーシアム関係者、地域住民、中学生等と三国高校生が地域の未来について懇談 <例>子供向け『海の授業』の企画など
- 『三国高校コミュニティデザイナー』の資格認定**
地域協働プロジェクトの取り組み成果に応じて認定
コンソーシアム・地域内の大学・企業等に資格の内容を周知し、進学・就職の際に評価
坂井市に『坂井市民コミュニティデザイナー』の創設を提案
- 学校設定教科「三国地域学」の開設**
「三国の文化資源探究」「三国の環境資源探究」で地域をテーマにした発展的な探究学習を実施
地域ボランティアや地域行事等への参加を「学校外活動」として単位認定



ふるさとや自分が暮らす地域に対する誇り・愛着 次世代の地域の担い手に必要な資質・能力を育成



【AARサイクル(見直し⇒実践⇒振り返り)で育てたい力】
 ○生きて働く知識・技能 ○学んだことを社会に活かす力
 ○多様な人との協力 ○困難に立ち向かう勇気と信念
 ○答えの定まらない問いに対応する思考力・判断力・表現力

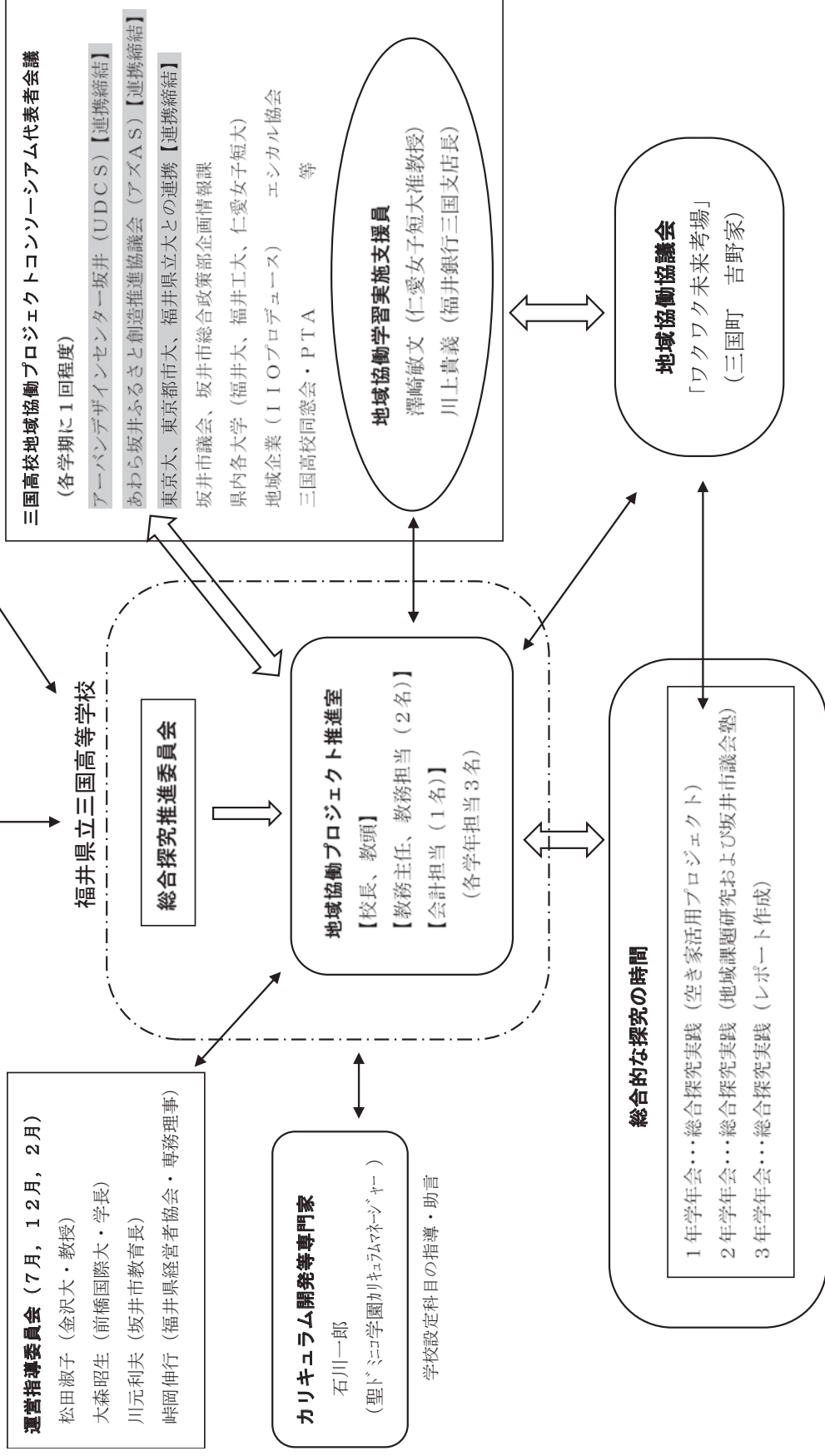
(1) 既存のものに新しい価値を見出し、
 (2) 今までの常識にとらわれない新たな活用法を提案し、
 (3) 地域の人々との行動で地域に幸せや希望をもたらす
イノベーション人材を育成



三国町内温泉施設の看板
(美術部デザイン)

組織図

福井県教育委員会 —— 福井県教育総合研究所



目 次

巻頭言

目 次

第1章 研究開発の概要 1

第2章 三高地域魅力化プロジェクト

2-1 1年生 10

2-2 2年生 15

2-3 3年生 21

第3章 地域探究同好会「地究」活動（ワクワク未来考場）

3-1 同好会会議記録 26

3-2 同好会活動記録 31

第4章 各教科での活動 40

第5章 事業を支援する運営指導委員会等の報告

5-1 総合的な探究の時間の外部講師とのミーティング 48

5-2 地域協働プロジェクト推進室会議 49

5-3 第1回運営指導委員会 52

5-4 校内授業研究会（教員自主研究グループ第3回研究会） 55

5-5 福井県立三国高等学校・UDCSアーバンデザインセンター坂井
地域との協働による高等学校教育改革事業に関する連携協定締結式 59

5-6 第2回運営指導委員会 60

第6章 資料

第1章 研究開発の概要（文部科学省提出書類より）

研究開発完了報告書（抜粋）

住所 福井県福井市大手3丁目17番1号
管理機関名 福井県教育委員会
代表者名 教育長 豊北 欽一

令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年5月25日（契約締結日） ～ 令和3年3月31日

2 指定校名・類型

学校名 福井県立三国高等学校
学校長名 上山 康一郎
類型 地域魅力化型

3 研究開発名

「あったらいいね」をカタチにする！
～ シビックプライドを持ったコミュニティデザイナーを育てる ～

4 研究開発概要

本校では、令和2年度からの新教育目標を「高い志を持って自律的に行動し、地域や社会の発展に貢献できる人を育成する」と定めた。これに基づき、地域との協働による高等学校教育改革推進事業においては、「地域とともにある学校」として、地域にある資源を活用して地域活性化に資するプロジェクトを地域人材と協働で実施することを通して、当事者意識を持って地域の未来を創造することのできる人材を育成する実践的な探究学習のためのカリキュラムを開発する。

5 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

※学校設定科目は令和3年度より開設

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
松田 淑子	金沢大学大学院教職実践研究科・教授	学校教育、探究学習
大森 昭生	共愛学園前橋国際大学・学長	学校教育、地域協働プログラム
川元 利夫	坂井市教育委員会・教育長	関係行政機関
峠岡 伸行	福井県経営者協会・専務理事	企業支援、人材育成

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
福井大学地域創生推進本部	末 信一郎 (本部長)
福井工業大学環境情報学部デザイン学科	矢部 希見子 (学部長)
仁愛女子短期大学生活科学学科	禿 正宣 (学長)
東京都市大学都市生活学部	三木 千壽 (学長)
坂井市議会	古屋 信二 (議長)
坂井市総合政策部企画情報課	坂本 憲男 (市長)
坂井市総合政策部まちづくり推進課	坂本 憲男 (市長)
アーバンデザインセンター坂井 (UDCS)	西村 幸夫 (センター長)
あわら坂井ふるさと創造推進協議会 (アズAS)	佐々木 康男 (会長・あわら市長)
地域企業 (IIIOプロデュース株式会社等)	伊藤 俊輔 (IIIO 代表取締役社長等)
雄島地区まちづくり協議会	鹿島 潤司 (会長)
一般社団法人三國會所	半澤 政丈 (会長)
三国本町商店会	谷下 栄一 (理事長)
三国高校同窓会	大和 久米登 (会長)
三国高校PTA	北村 辰一 (会長)

8 カリキュラム開発専門家, 海外交流アドバイザー, 地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	石川 一郎	聖ドミニコ学園・カリキュラムマネージャー	雇用関係なし
地域協働学習実施支援員	澤崎 敏文	仁愛女子短期大学・准教授	雇用関係なし
地域協働学習実施支援員	川上 貴義	福井銀行三国支店・支店長	雇用関係なし

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程									
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会					1回				1回	
連携締結						1回				

(2) 実績の説明

- ・継続的な取組を行うための教員の人事面の配慮として、加配の計画
- ・運営指導委員会の運営および指導・助言
- ・地域人材の継続的な連携の支援および3者相互連携の強化
- ・三国高校とアーバンデザインセンター坂井 (以後UDCSと呼ぶ) の間で相互連携協定締結

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程									
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コミュニティデザイナー認定									1回	1回
教科探究学習					3回	1回		1回	2回	
総合探究発表会						1回	2回		1回	
地域探究同好会 ワクワク未来考場	3回	1回	6回	2回	5回	3回	2回			3回

(2) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

(ア) コミュニティデザイナーの認定

本校では生徒が三国という地域の住民としての意識を持って、地域の未来を創造することのできる実践的な探究学習に取り組むことで、この地域の将来の地域人材として活躍するという意識を持ったコミュニティデザイナーの資格認定制度の開発に取り組む。今年度の活動を総合的に評価し3年生は2月、1・2年生は3月に認定を実施した。

(イ) 教科探究学習

国語科による三国龍翔館前館長を招いての「三国の文学」についての授業を、2月上旬に2回、2年文Ⅱ系列クラスに実施した。

理科による地元企業を招いての「電池のしくみ(酸化還元)」授業を、11月に2年理Ⅰ系列クラスに実施した。また、10月に越前松島水族館館長による「海洋生物の調査保護」の講義授業と水族館の実地調査を3年理系生物選択者に対して実施した。

家庭科による「三国の伝統文化(刺し子)」の授業を、10月に3年文Ⅱ系列の服飾文化選択者に対して実施した。また、「雄島海女の素潜り漁と加工技術」の授業を、1月に2年文Ⅱ系列のフードデザイン選択者に対して実施した。

(ウ) 総合探究発表会

総合的な探究の時間での各学年の取り組みを「三高地域魅力化プロジェクト」という名称で統一することにした。

1年生では三国町内の空き家活用プロジェクトを企画立案し、2学期末に実際の空き家を使って地域住民に活用方法を紹介する活動に取り組んだ。今年度は11月中旬にコンソーシアム団体のUDCSとあわら坂井ふるさと創造推進協議会(アズAS)の参加をいただき、生徒の考えた空き家活用アイデアコンペを実施した。また、12月下旬には4クラスがそれぞれ1つの空き家を使い、自分たちの考えた活用方法を実践した。

2年生では地域の様々な問題について探究し、問題の解決方法を地元公共団体に提言する取り組みを行った。今年度は12月に坂井市市役所職員と福井大学・福井工業大学の学生のアドバイザーに参加いただき、中間発表会を実施した。また、2月は坂井市議会議員と市役所職員にご参加いただき、本番の発表会を実施した。

さらに、2年生の一部グループは福井県立武生高等学校SSH交流会に参加し生徒交流会で発表した。

3年生では2年次までのプロジェクトの成果を研究レポートにまとめた。

(エ) 地域探究同好会の活動

本年度から地域との協働活動をする生徒の組織として地域探究同好会を設立した。部員は18名。三国町の空き家のひとつの「吉野家」を拠点として活動を行った。

6月には拠点となる吉野家の清掃と今後の活動を考える会議を実施した。7月には吉野家の中庭整備を行った。

8月になり三国町雄島地区まちづくり協議会主催の「海からの贈り物」イベントの同好会企画会議を5回実施した。また、三国で空き家活用を実践している東京大学と東京都市大学の研究者および大学生と連携するオンライン会議を実施した。

9月と10月には吉野家の修繕について地元業者と連携するための会議を持ち、10月下旬に開催される「三國湊フェア」参加のために地元団体との会議や準備を協働で行った。また、同時に10月中旬には坂井市SDGsキャッチフレーズを考える企画に参加し、11月には三国の地域デザインを研究している福井工業大学の大学院生と共に、三国を印象付ける言葉を探すコトバワークを実施した。

12月中旬に実施した吉野家リフォームのために、地元の建具店と製畳所を事前見学し、リフォーム当日は瓦屋根の修繕も含めて地元業者との協働修繕活動を行った。

(オ) ワクワク未来考場の推進

地域住民と三国高校生が地域の未来について懇談する場、「ワクワク未来考場」を実施した。8月中旬に開催された雄島地区まちづくり協議会主催の「海からの贈り物」企画会議に参加し、三国サンセットビーチの今後の在り方の議論に参加した。10月の「三國湊フェア」の開催では、いろいろな準備を通して本町商店会・三国會所の方々と地元イベントを通した町の活性化について考えた。

また、吉野家を拠点に空き家活用の提案をすることで、地域住民の方々と交流の機会を持つことができた。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付けについて [各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等]

(ア) 各教科・科目

地域人材を活用した授業を各教科の授業で取り組む。

(イ) 三高地域魅力化プロジェクト

- ・1年次に総合的な探究の時間において、三国の地域課題を学ぶ活動を通して得た知識を活かして、三国の空き家活用を実践する取り組みを行う。
- ・2年次に総合的な探究の時間において、地域の様々な課題について、コンソーシアム団体の協力を得ながら独自の提言案をまとめ、坂井市市議会議員に提言案を説明する。

(ウ) 三国地域学

令和3年度より2年生から段階的に学校設定教科「三国地域学」を開設し、各教科との関連を深めていく。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断

的な学習とする取組について

- ・次年度からの学校設定教科「三国地域学」で各教科を横断した探究的な学びを進める。

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制について

(ア) 地域協働プロジェクト推進室

校長，教頭，教務主任および事務局6名の推進室を設置した。

(イ) コンソーシアム団体との連携

推進室が、総合的な探究の時間の企画，令和3年度からの学校設定科目の企画開発，地域探究同好会の活動計画の立案および地域協働学習実施支援員と協力して、各コンソーシアム団体との連絡調整を行う。

⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

(ア) 三高地域魅力化プロジェクト

各学年会の教員が中心になって運営し、それぞれの事業でそれぞれのコンソーシアム団体と連携協働し、プロジェクトを推進する。

(イ) 地域探究同好会

担当教員3名で同好会の拠点となる空き家を活用し、地域住民との交流事業を推進する。

⑥カリキュラム開発専門家、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置づけについて

(ア) カリキュラム開発専門家

令和3年度より実施する三国地域学の科目の一つである「三国文化資源探究」について、実施方法や各教科の横断的な学習の進め方についてアドバイスを受ける。

(イ) 地域協働学習実施支援員

三高地域魅力化プロジェクトでの1年生の「空き家活用プロジェクト」や2年生の「地域問題探究と提言」に関して、各コンソーシアム団体との連絡調整を行う。

⑦学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

(ア) 教員研修会

外部有識者（運営指導委員・カリキュラム開発専門家）による総合探究の意義や、カリキュラムマネジメントの研修会を実施。

(イ) 職員協議会

地域協働プロジェクト推進室会議を定期的に行い進捗状況の共有を行う。また、全職員による職員協議会で各取り組みの進捗状況を報告し、取り組みの共有と問題点の把握をする。

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

(ア) 三国地域魅力化プロジェクト

1年生は東京都市大学都市生活学部およびUDCSとの協働を中心に事業を推進する。

2年生は東京都大学都市生活学部、福井大学地域創生推進本部、福井工業大学環境情報部および坂井市役所との協働によって事業を推進する。

3年生は研究レポートのまとめにあたり、福井大学と連携しレポート作成の方法を学ぶ。

(イ) 三国地域学

令和3年度からの実施に向け、カリキュラム開発専門家のアドバイスを受けて、地元企業や地元関係団体との連携を交渉中である。

⑨運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

- ・令和2年度の総合探究活動での取組を振り返り、活動の内容をより深めるために、令和3年度からの学校設定教科「三国地域学」に対する取組の重要性の指摘を受け、坂井市からの援助を受けて本校独自の支援員を配置する予定。

⑩類型毎の趣旨に応じた取組について（令和3年度より）

(ア) 三国の文化資源探究

国語科、地歴公民科、英語科、芸術科、家庭科の教員が協力し、三国の伝統・文化・文学・芸術・歴史・食文化等について探究学習を実施する。

(イ) 三国の環境資源探究

理科、数学科、体育科の教員が協力し、三国の海の保全・ごみ問題・海洋生物・エネルギー生産・浄水処理等について探究学習を実施する。

⑪成果の普及方法・実績について

(ア) 研究報告書

令和2年度の研究開発実践について研究報告書を作成し、関係のコンソーシアム団体や協力者に配付する。

(イ) 三高地域魅力化プロジェクト報告書

2年生で実施した地域の様々な問題に関するグループ別の提言書を、研究レポートとしてまとめた報告書を発行する。また、生徒や関係のコンソーシアム団体の協力者に配付する。

(ウ) 広報活動

学校のホームページに様々な活動を掲載し発信する。また広報誌「三高 NEWS」を発行し、地元中学校に配付する。

1.1 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 高校魅力化アンケートより

高校魅力化評価システムの組織診断ポートフォリオによるアンケートの集計結果から、本校生徒の結果と他地域の結果との差が5%以上大きい項目と5%以上小さい項目を抽出すると次のようになった。

項 目	本 校	他地域との差
活動、学習のまとめを発表する	60.6%	- 6.69%
地域の魅力や資源について考える	66.3	+ 11.24
地域の課題や解決方法について考える	70.0	+ 14.19
日本や世界の課題の解決法について考える	38.6	- 12.52
地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	71.5	+ 5.62
私は、自分自身に満足している	55.9	+ 5.49
目標を設定し、確実に行動することができる	68.1	+ 5.15
自分で計画を立てて活動することができる	70.3	+ 6.80
友達の前で自分の意見を発表することは得意だ	64.4	+ 7.52
家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する	73.3	+ 7.78
地域を対象とした課題探究学習に熱心に取り組んでいる	62.9	+ 7.38
勉強したものを実際に応用してみる	68.3	+ 5.59
自分の将来について明るい希望を持っている	76.5	+ 5.05
授業で分からないことを、自分から質問したり、分かる人に聞いた	80.4	+ 5.55
授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	65.8	+ 10.63
授業で「なぜそうなるのか」と疑問を持って、考えたり調べたりした	69.1	+ 6.51
公式やきまりを習う時、その根拠を自分で考えたり調べたりした	65.3	+ 6.31
いま住んでいる地域の行事に参加した	43.1	+ 6.76
地域社会などでボランティア活動に参加した	47.3	+ 12.63

アンケートには全部で74個の項目がある。本校の生徒と他地域との結果の差が5%以上大きい項目は17個あり、他地域との差が5%以上小さい項目は「活動、学習のまとめを発表する」「日本や世界の課題の解決法について考える」の2個の項目であった。福井県の坂井市という地方の小さな町であるが、生徒は中学校から地域についての調べ学習に慣れ親しんでいる上、本校に入学してから総合探究活動での「三高地域魅力化プロジェクト」等で、様々な地域探究活動に取り組んでいる結果と思われる。来年度以降は発表の機会を増やし、日本全体や世界にも目を向けられるような取組を進める必要がある。

(2) 目標設定シート

目標設定シートに関する項目については、2月に本校独自のアンケートを実施し、以下の項目について分析を行った。

①本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

(ア) 「三国高校コミュニティデザイナー」等の認定を受けた生徒の割合を最終年次30%とする。

三国高校では3年前より総合探究活動として、1年生は三国の空き家活用に取り組んでいる。ま

た、2年生は坂井市の地域活性化の提言をする取り組みを行っている。

当初は上記の資格認定を、三高地域魅力化プロジェクトを实践した生徒全員に与えようと考えていたが、活動をしていく中で、特に顕著な活動をした生徒に対して「コミュニティデザイナー」の資格を与えるように変更した。

今年度は2年生については、2月に行われた研究成果の発表会を行ったときに、坂井市の議員・職員にループリック形式のアンケートをしていただき、その中から優秀な生徒19名を選んだ。3年生については、1・2年次に総合探究活動を積極的に行い、地域探究同好会の部長・副部長をつとめて同好会の活動を引っ張り、地域住民との交流の場である「ワクワク未来考場」の行事にも参加した2人を選んだ。認定を受けた生徒の割合は、全校生徒の中の4.9%であった。残念ながら初年度の目標（10%）は達成できなかった。

「コミュニティデザイナー」の資格認定については、2回の運営指導委員会の中でも様々な議論があった。外部人材の意見だけではなく、自己評価をもっと工夫して生徒自身が「自分は積極的に探究活動に取り組んできた」と考える生徒に与える資格にするべきだという助言もいただいた。今後、議論を深めて資格認定の条件を研究していく必要がある。

- (イ) **就職志望者のうち県内に就職する生徒の割合を95%以上、進学志望者のうち将来県内での就職を希望する生徒の割合を80%以上とする。**

就職を希望している生徒のうち、福井県で就職したいと思っている生徒と3年生で福井県の会社または地方公共団体に就職の内定をもらっている割合は、89%で初年度の目標（85%）を上回っている。1年生の就職希望者は7名でそのうち福井県で就職したいと考えている生徒は全員で、割合は100%である。2年生の就職希望者は18名でそのうち福井県で就職したいと思っている生徒は14名で割合は78%である。3年生の就職希望者は22名でそのうち福井県で就職が決定している生徒は21名であり、割合は95%であった。

大学・短大・専門学校などの進学志望者のうち将来県内での就職を希望する生徒の割合は63%で初年度の目標（60%）を達成している。1年生の進学希望者は99名で、そのうち将来は福井県で就職したいと思っている生徒は71名で割合は72%である。2年生の進学希望者は113名で、そのうち将来は福井県で就職したいと思っている生徒は72名で割合は64%である。3年生の進学希望者は142名で、そのうち将来は福井県で就職したいと思っている生徒は79名で割合は56%である。

- (ウ) **アンケートで「ふるさとに対する愛着が深まった」と回答する生徒の割合を90%とする。**

アンケートで「ふるさとに対する愛着が深まった」と回答する生徒の割合は82%で初年度の目標（70%）を達成している。「ふるさとに対する愛着が深まった」と回答する生徒の割合は1年生では88%、2年生では76%、3年生では83%であった。

②地域人材を育成する高校としての活動指標

- (ア) **三高地域魅力化プロジェクトの実施回数を最終年次20回とする。**

初年度目標 10回

1, 2年ともにプロジェクトを進めるにあたりコンソーシアム関係者の協力をいただくのにオンライン形式での講義やアドバイスを受ける機会が多かった。1年生ではオンライン講義3回とアイデアコンペ1回、空き家活用プロジェクト本番1回を実施、2年生ではガイダンス講義1回とオ

オンライン講義2回、中間発表会1回、本番発表会1回を実施した。合計10回で初年度の目標を達成した。

(イ) 県内外における合同発表会・研究報告会等への参加回数を最終年次8回とする。

初年度目標 4回

今年は新型コロナウイルスの影響で他県への訪問は全くできなかった。生徒の発表会参加が1回、教員のみが参加した発表会が3回である。県内のみで合計4回の参加で初年度の目標を達成した。

③地域人材を育成する地域としての活動指標

(ア) 三高地域魅力化プロジェクトや地域における活動に参画する外部人材の延べ人数を最終年100人とする。

初年度目標 50人

- ・コンソーシアム打ち合わせ会議・・・延べ7名
 - ・三高地域魅力化プロジェクト・・・(1年)延べ12名 (2年)延べ34名
 - ・教科探究学習・・・(国語)2名(理科)5名(家庭科)3名
- 合計延べ人数63名で初年度の目標を達成した。

1.2 次年度以降の課題及び改善点

(1) 三高地域魅力化プロジェクト

今年度の発表会については、1年生では10月の空き家活用プロジェクトのアイデアコンペ大会や12月の空き家活用プロジェクト本番を実施し、2年生は12月の中間発表会を実施し、2月の本番発表会で外部の関係者の前での発表を行うが、生徒にとっては発表の機会がまだ少ない。来年度以降はより頻繁に人前での発表の機会を作る必要がある。

(2) 地域探究同好会

様々な地域の方とのイベント事業を行うことができ、地域との交流活動が深まってきているが、活動の拠点となる空き家の「吉野家」は、今年度は修繕することに重点が置かれた。地域住民を招いての交流は12月の「空き家活用プロジェクト」と3月の地域の小中学生を招待した「吉野家スプリングイベント」のみであった。来年度からは本格的に吉野家での交流事業を進めていきたい。

(3) 三国高校コミュニティデザイナーの資格認定

本校独自のコミュニティデザイナーの資格認定に際して、1年目の今年度は認定した生徒が少数になった。来年度は認定条件を地域協働プロジェクト推進室と外部関係者や生徒の代表が議論し、客観性を持ち多くの生徒が資格認定できる制度として構築していく必要がある。

第2章 三高地域魅力化プロジェクト

2-1 1年生

(1) 事業の概要

1年生では、三国町北本町地区の空き家を活用して、地域活性化に資する活動を企画・運営する「空き家（町家）活用プロジェクト」を1年間かけて行った。具体的には、4クラスがそれぞれ空き家を担当し、高校生自らが空き家の活用法を考え、「空き家をつかったイベント」を提案し、実践するものである。

(2) 事業目的

以下の3点を掲げた。

- ①三国町の空き家の現状を理解し、地域が抱える問題について考える契機とする。
- ②地域の課題解決のためにできることを考えたり企画・実践したりすることを通して、地域に対する思いや当事者意識を育てるとともに、地域に貢献しようとする心を育む。
- ③発想力や計画力、主体性や協調性、思考力・判断力・表現力、探究心や挑戦意欲などを養い、本校の教育目標の実現に資する。

(3) 事業計画（右側に①～④とあるのは、事業実績紹介あり）

月 日	学 習 活 動
6月16日	講演会（1） 中島伸氏による地域探究活動を行う上での心構え紹介
6月23日	講演会（2） 東京都市大学院生によるまちづくり企画の事例紹介と空き家でイベントをする際のアドバイス
7月21日	UDCSによる三国町町中探索 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・①
7月28日	探索の振り返り
9月 8日	2年生からの空き家活用のアドバイスとグループ発表
9月15日	グループでの企画立案（1）
10月 6日	グループでの企画立案（2）
10月 2日	コンペ大会準備（1）
11月10日	コンペ大会準備（2）
11月17日	コンペ大会 各グループの企画を発表し合い、クラス内の優秀企画を選考。この企画が空き家活用プロジェクト本番の企画のベースとなる ・・・・・・・・・・・・・・・・・・②
11月24日	各クラスで企画のブラッシュアップ
12月 1日	空き家活用プロジェクト発表準備（1）
12月15日	空き家活用プロジェクト発表準備（2）
冬休み期間	空き家活用プロジェクト発表準備（3～4） ・・・・・・・・・・③
12月25日	空き家活用プロジェクト本番 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・④
R3年1月	空き家活用プロジェクト振り返り（大雪による休校のため自宅課題）
2月 2日	講演会（3） 福井大学 竹本教授によるレポートの書き方についてのアドバイス

2月 9日	空き家活用プロジェクトについてレポート作成 (1) (Chromebook 活用)
2月16日	空き家活用プロジェクトについてレポート作成 (2) (Chromebook 活用)
3月 9日	レポートを共有、評価

(4) 事業実績紹介

① 三国町町中探索

活動内容…三国町の中心部を実際に歩いてみることで、三国町の魅力と課題点を知り、何よりも空き家が多数生まれていることを知ることで、活用プロジェクトの動機付けを行った。連携協定を結んでいるUDCSの協力を得て、チェックポイントを4つ設け、そのチェックポイントでそれぞれ担当者の説明を受けると共に、チェックポイント間での要所では担任副担任による解説を行った。三国町出身の生徒にとっても馴染みがないポイントを探したため、生徒は興味津々で講師の話の聞いたり町家のリノベーションの例を見たりして、空き家活用へのアイデアを考えていた。



② 空き家活用アイデアコンペ大会

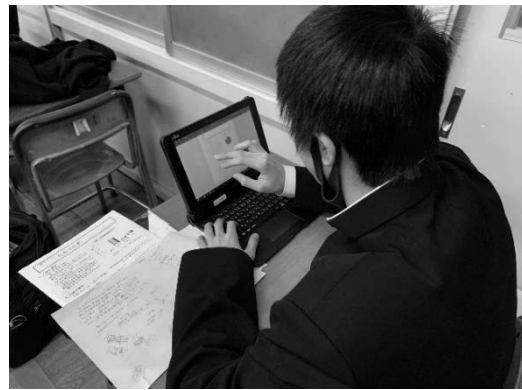
活動内容…9月より5～6人程度のグループで考えてきた空き家活用のアイデアをそれぞれ発表し互いに評価しあった。体育館に各班のポスターを張り出し、時間で発表する側と聞く側を交代し、自分のクラスとは別のクラスの評価を行った。生徒は自分たちで考えたアイデアをわかりやすく説明するため様々な工夫を施していた。評価する側はループブックに沿って評価を行った。また、地域探究事業のコンソーシアムの方々にも来校いただき、評価をしていただいた。



③ 空き家活用プロジェクト準備

活動内容… 11月のコンペで選ばれた代表班のアイデアをベースにブラッシュアップを行ってクラスの空き家アイデアをまとめていった。クラスの他の班のアイデアをミックスするなど、様々に深め、かつ広めていった。アイデアがまとまった後はクラスで役割分担を行い、空き家本番の準備に入った。内装・外装・広報・資料作成・体験活動担当などに分かれ、それぞれで準備を進めていった。準備の中で地域の方々の協力を得ることもあり、生徒たちにとって外部の方々と交流する良い機会となった。

また、広報の一環としてポスターを作成し、付近の中学校と公共施設、えちぜん鉄道の各駅に貼らせていただいた。えちぜん鉄道三国駅には、大判のポスターのパネルを設置し、三国駅を利用するお客さんへの周知に努めた。



④ 空き家活用プロジェクト本番

(ア) 活動内容… 11月のコンペ以降各クラスでアイデアを一本化し、各クラスとも物品購入や地域の方々からの協力を受け、準備を行ってきた。UDCSから4軒空き家を選定してもらい、クラスごとに割り当てた。12月前半に広報活動が本格化、冬休みに入ってから最終準備に入り、当日を迎えた。10時から15時まで生徒が交代で店番をする中、地域の大人の方々、教職員、地元の幼稚園児や三国高校の先輩たち等が多数来場し、盛況となった。

(イ) 各クラスの企画内容

1 組	安島 MOCCO
	企画内容：三国の安島地区独自の「もっこ刺し」を紹介し、刺し子体験活動を企画した。もっこ刺し協会の方々の協力も得て、沢山の展示品を置いた。
2 組	二組祭～三国祭体験～
	企画内容：三国祭について知ったり体験できたりする博物館をコンセプトに、三国祭の太鼓体験や屋台を模してお菓子釣りができるようにした。また三国花火の映像も見つつ、三国祭の歴史や提灯などの細かい知識なども紹介した。

3 組	くらふとばーく
	企画内容：人口減少もあり若者が少なくなっている三国で、こども達をターゲットにして、三国の良さを知ってもらえるような企画をした。 スノードームや魚釣りにおいて三国の「海」を知ってもらい。えちぜん鉄道のクラフトペーパー作りにおいては、作ったえちぜん鉄道を走らせ、三国の名所を知ってもらえるような企画を考えた。
4 組	むかしあそび～ふれあいの場～
	企画内容：4種類（けん玉、お手玉、こま、おはじき）の昔遊びを来場者に体験してもらった。高齢者にとっては幼少期を思い出すきっかけとなった。若い世代にとっては現代とは違う、ある種「新しい」遊びを知ってもらうきっかけとなった。

(ウ) 生徒の感想

- ・ただの空き家だけれど、活用の仕方を工夫すれば、可能性がたくさんあるのだと実体験できた。
- ・一から自分たちで行ったことで達成感を得られた。
- ・地域の人たちを相手にする緊張感や話す際の言葉選びの難しさを体感できた。自分の進路や将来にこの経験を活かしたい。
- ・自分たちで自分たちの町を発展させていくということを初めてしました。
- ・このような活動は、やってみて初めて大変さがわかると感じました。しかし空き家活動で多くのお客さんが来場し、企画に喜んでくれたことで達成感を得られました。

(エ) 記録写真





(オ) 事業の総括と今後に向けて

空き家活用プロジェクトは、今回で3年目になり、UDCSとの連携もスムーズに行えたように感じた。一方、これまでのプロジェクトでは、「カフェ」を行うクラスが多く、あまり差別化できていないと感じていた。

今年はコロナ禍の中で、飲食物の配布に制限を設けた。カフェができない中で、4クラスの生徒たちが出してきたアイディアは体験を重視した非常に素晴らしいものであった。今回の空き家では地域の文化に根差した体験ができるアイディアが多く、結果として地域の方々の多大な協力を得ることになった。地域の人からも高校生が北本町をたくさん歩いてくれ、にぎやかな雰囲気を作ってくれていると喜んでいただいた。

今後に向けては、いかにこの体験を次の自分たちの探究に生かすかが課題である。空き家プロジェクトでの活動をレポートの形式にまとめたが、体験したことを羅列するだけになって考察ができていない生徒が多い。2年次にはもっと大きな視点で、坂井市の魅力化のアイディアを考えるので、今回の体験をうまく生かしてほしいと考えている。

2-2 2年生

(1) 事業の概要

2年生では、1年次に行った三国地区の空き家問題解決に向けたプロジェクト学習のサイクルを発展させ、三国地区や坂井市、福井県と地域を広げ、地域の課題解決に向け課題発見段階からプロジェクト学習を行った。各グループでの地域の課題解決に向けたアイディアは提言として、令和3年2月2日に行った「三高地域魅力化プロジェクト発表会」にて坂井市議会議員および坂井市役所職員に向けてプレゼンテーションを行い、その後、提言書を作成した。

(2) 事業目的

以下の3点を掲げた。

- ①地域の実情を知り、地域をより活性化させていくために、先行事例を研究する。
- ②地域の空き家の活用を通して、地域活性化の案を主体的に考える。
- ③問題解決や探究活動に主体的・協働的に取り組み、自己の在り方・生き方について考えるとともに、地域の発展に貢献しようとする態度を養う。

(3) 事業計画（右側に①～⑥とあるのは、事業実績紹介あり）

月 日	学 習 活 動
6月 2日	オリエンテーション
6月 9日	地域を学ぶ(1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・① 三国高校同窓会会長 大和 久米登 氏による講演
6月16日	地域を学ぶ(2) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・② 東京都市大学都市生活学部 准教授 中島 伸 氏による講演
6月23日	事例研究(1) 稼げるまちづくり取組事例集『地域のチャレンジ100』（内閣府地方創生推進事務局）から興味のある事例を選び、まとめる。
6月30日	事例研究(2) 前回と今回でまとめた取り組み事例を、共有する。
7月 7日	個人テーマ設定(1) 坂井市の取り組みを調べ、プロジェクト学習の課題設定の参考にする。
7月21日	個人テーマ設定(2)
8月 4日	個人レポート作成(1) および実地調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・③ 地域の課題解決のための提言を、A4用紙2～3枚程度のレポートとして、データで作成する。また、希望者は実地調査を行う。
夏季休業中	個人レポート作成(2)
9月 8日	レポートのブラッシュアップ ・・・・・・・・・・・・・・・・④ 福井大学地域創生推進本部 教授 竹本 拓治 氏による講演

9月29日	個人レポートの自己評価 レポートについてのループバックを用いて、自分の作成したレポートを吟味しブラッシュアップし、個人レポートを完成させる。
10月6日	個人レポートの相互評価 レポートをグループ内で読み合い、相互に評価、アドバイスをする。
10月27日	グループ編成 三高地域魅力化プロジェクト発表会に向けて、グループ編成を行う。
11月10日	グループ別提言作成 (1)
11月17日	グループ別提言作成 (2)
11月24日	中間発表リハーサル
12月1日	中間発表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・⑤ 三高地域魅力化プロジェクト発表会に向けた中間発表
12月16日	中間発表の振り返り
冬季休業中	調査研究および最終提言作成
1月20日	グループ別提言作成 (3)
1月26日	グループ別提言作成 (4)
1月28日	三高地域魅力化プロジェクト発表会リハーサル
2月2日	三高地域魅力化プロジェクト発表会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・⑥
2月9日	グループ別提言書作成 (1) 三高地域魅力化プロジェクト発表会での反省を生かし、提言書を作成する
2月16日	グループ別提言書作成 (2)
3月	グループ別提言書作成 (3)

(4) 事業実績紹介

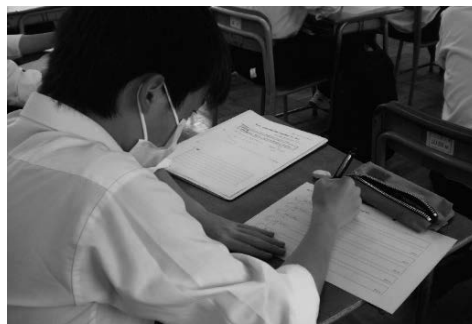
① 地域を学ぶ(1)

活動内容…三国高校同窓会会長 大和 久米登 氏による講演。地域についての知識が不足しているという昨年度の反省からプロジェクト学習の課題設定の前に地域の歴史を学んだ。大和氏は一般社団法人三國會所の理事を務めており、三国の地域の歴史に詳しい。三国の歴史の奥深さを平易な言葉で分かり易く伝えていただいた。



② 地域を学ぶ(2)『三国のまちについて知る』

活動内容…東京都市大学都市生活学部 准教授 中島 伸 氏による、オンライン形式での講演。中島氏は都市デザイン、景観まちづくりなどを専門とし、UDCS副センター長を務める。1年次の空き家活用プロジェクトから継続的にアドバイスをいただいている。今回は1年次の空き家イベントを踏まえ、今年度、どのように地域の課題を解決していくかの方法についてレクチャーを受けた。「WANT：私がやりたいこと」「CAN：私ができること」「NEED：地域が求めていること」の3つの輪が重なるところがまちづくりの企画になること、課題には疑問文で本質に迫り、5WHYSで考えを深めることなどを学んだ。



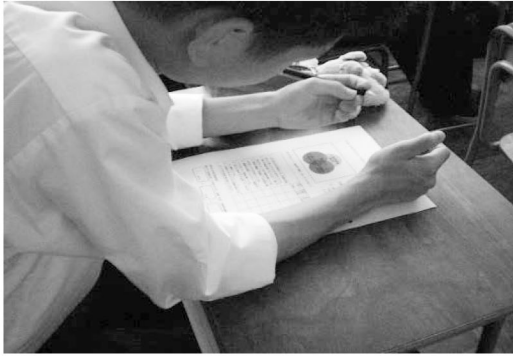
③ 実地調査

活動内容…これまでに先行事例研究として調べてきた様々な地域活性化の事業を参考に、三国が抱える課題とその解決策について仮説を立て実地調査を行った。地域の会社や商店、団体を自分たちで訪ねたり電話取材を申し込んだりして、三国の魅力や問題点、その解決のために取り組んでいることなどを聞き取った。地域を越えた仕事や県外での生活体験を踏まえたお話を伺うことができ、大いに参考になった様子だった。



④ レポートのブラッシュアップ

活動内容…福井大学地域創生推進本部 教授 竹本 拓治 氏による、オンライン形式での講演。レポートを自己評価し、ブラッシュアップする方法について、「先行事例を活かす」、「論理性に注意する」、「読む人を意識する」などを学んだ。



⑤ 中間発表

活動内容…各グループがそれぞれの提言について、テーマを設定した背景と現状分析、自分たちの主張、目指す地域や環境等の将来の姿、今後の課題について発表した。坂井市役所職員と福井大学、福井県立大学の学生それぞれ1名ずつを各会場のアドバイザーとして迎えた。

特に坂井市役所職員からは、生徒の提言の実現可能性を、大学生からは提言の論理展開を指摘していただいた。



⑥ 三高地域魅力化プロジェクト発表会

(ア)活動内容…各グループがそれぞれの提言について、テーマを設定した背景と現状分析、自分たちの主張、目指す地域や環境等の将来の姿、今後の課題について発表した。坂井市議会議員2名と坂井市役所職員1名を各会場のアドバイザーとして迎えた。

(イ) 提言一覧

番号	タイトル	番号	タイトル
1	明るく楽しく元気よく町を育てよう	22	再利用からなる町
2	make lovely café	23	集まれ！三国の家 ～三国の明るい未来のために～
3	三国に未来を創る人を集める	24	全国 people ATTRACT
4	見たこともない景色見てみない？	25	SNSで三国の魅力を知ってもらおう
5	伝統を歩く	26	水質汚濁の防止とゴミの削減
6	広めよう！僕らの観光地	27	若者の県外流出を防ぐため
7	YouTuber と町おこし	28	地域行事のPR
8	三国をPR・発展させるSNS活動	29	三国の魅力を広めて若い人を呼び込もう！
9	坂井市 with SNS	30	町に融け込む観光へ
10	三国を生かした観光ツアー	31	三国の特産物食ってみろ！飛ぶぞ！
11	ゴミを減らして住みやすい町に	32	空き家改造プロジェクト
12	土地の整備で観光客を迎えよう	33	外国人に適した三国の街づくり
13	交通手段の増加と強化	34	PRで変わる未来
14	移動車販売でコロナ対策	35	三国の夜に色彩を！
15	三国町ゴミ零計画	36	坂井市産業活性化大作戦！
16	交通・観光事業拡大による町おこし	37	住み続けたいと思う街づくり
17	暮らしやすいまちへ 住み続けられるまちづくりを	38	SNSを利用して三国を有名にしよう
18	SNSで三国の魅力を伝える	39	道の整備で三国に 持続可能な安全を実現する
19	SNSで発信三国の魅力	40	三国をきれいに、活性化しよう！
20	世界に広がる三国	41	魅力の発酵
21	食をつかって三国を全国へ発信	42	空き家問題をぶっ壊す！

(ウ) 記録写真



(5) レポート・発表に関するループリック

9月8日に行った福井大学地域創生推進本部 教授 竹本 拓治 氏による講演内容をもとに、レポート作成やプレゼンテーションのループリックを作成し、生徒と共有した。多くの機会でのこのループリックを用いて、自身の文章などについて振り返りを行い、目標設定を行った。(下の表は中間発表時のループリック)

総合的な探究の時間 グループ中間発表のループリック (評価表)

評価の項目		A	B	C	D	E	
発表の技術	聞く人に配慮する	① アイコンタクトやポスターの指さしなど聴衆への配慮を発表者全員が行っている。		アイコンタクトやポスターの指さしなど聴衆への配慮を一部の発表者が行っている。		発表者全員にアイコンタクトやポスターの指さしなど聴衆への配慮がない。	
		② 発表者全員が声量・スピードともに聞き取りやすい。		一部の発表者の声量やスピードが聞き取りにくい。		発表者全員の声が聞き取りにくい。	
提言の示し方	先行研究を活かす	③ 先行研究や先行事例を入れ、自分たちの地域との共通点または違いのどちらかを明示している。		先行研究や先行事例は書かれているが、自分たちの地域との共通点や違いを明示していない。		先行研究も先行事例も明示していない。	
		④ 調べた結果を書くだけでなく、調べた内容をもとに、自分の提案を述べている。		調べた結果は書いているが、調査内容と提案の内容がずれている。		調べた結果だけで、自分の提案を述べていない。	
	論理性に注意する	⑤ 「現状と課題」「改善策」「その結果(将来の姿)」の3点がつながりよく述べられている。		「現状と課題」「改善策」「その結果(将来の姿)」を述べているが、飛躍がある。		「現状と課題」「改善策」「その結果(将来の姿)」のいずれかが抜けている。	
		⑥ 客観的な根拠(インタビュー内容やデータ)をもとに、結論を述べている。		客観性の低い根拠(自分の想像など)をもとに、結論を述べている。		根拠なしに結論を述べている。	
	聴衆を意識する	⑦ 図または表やグラフを効果的に用いて説明している。		図または表やグラフがあるが、効果的でない。		図または表やグラフがない。	
		⑧ ポスターが発表内容を簡潔かつ見やすく表現していて、人を惹きつける。		ポスターが発表内容を簡潔に表現しているが、見にくい。		ポスターと発表内容が合致していない。	
	提言の内容	Can	⑨ 提言を実行するための方法が具体的に説明されており、実行が可能に思える内容である。		実行が可能に思える内容だが、具体的な方法を説明していない。		実行が不可能な内容である。
		Need	⑩ 課題・解決策ともに、多様な地域住民の多くにとって利益になる内容である。		多様な地域住民に関わる課題を取り上げているが、解決策は一部の地域住民の利益にしかならない。		課題・解決策ともに、多様な地域住民に受け入れられるものではない。
Want (自己評価)		⑪ 興味をもって積極的に提言を作成している。		興味をもって提言を作成しているが積極的ではない。		いやいや提言を作成している。	

2-3 3年生

(1) 事業の概要

3年生では、1・2年生で行ってきた探究活動について振り返り、レポートにまとめる活動を中心に行った。その他、卒業学年として進路の実現に向けた活動を多く行った。具体的には、志望理由や自己PR文を考えたり、新聞記事を利用して要約や発表を行ったりして、知識を深め、各自の思考力・判断力・表現力を養った。

(2) 事業目的

教科横断的・総合的な学習や探究的な学習を通じて自ら課題を見つけ、その課題を他者と協働して解決する能力を育成するとともに、自己の在り方生き方について考察する。

(3) 事業計画（右側に①～④とあるのは、事業実績紹介あり）

月 日	学 習 活 動
6月 2日	志望理由書・自己PR文(1)・・・・・・・・・・・・・・・・①
6月 9日	志望理由書・自己PR文(2)
6月16日	志望理由書・自己PR文模試
6月23日	探究活動報告書づくり(1)・・・・・・・・・・・・・・・・②
6月30日	探究活動報告書づくり(2)
7月 7日	考査前学習
7月21日	探究活動報告書づくり(3)・小論文ガイダンス(1)(希望者)
8月 4日	高校地域魅力化アンケート
8月	大学、短大、専門学校、企業見学
8・9月	学校祭準備および学校祭
9月 8日	新聞記事要約による情報整理(1)・・・・・・・・・・・・③
9月15日	新聞記事要約による情報整理(2)
9月29日	新聞記事要約による情報整理(3)
10月 6日	新聞記事要約による情報整理(4)
10月27日	新聞記事要約による情報整理(5)・小論文ガイダンス(2)(希望者)
11月10日	新聞記事要約による情報整理(6)
11月17日	報告書のデータ化(1)・・・・・・・・・・・・・・・・④
11月24日	報告書のデータ化(2)
12月 1日	報告書のデータ化(3)
12月15日	報告書のデータ化(4)
1月12日	レポート発表 ※大雪による休校のため中止

(4) 事業実績紹介

① 志望理由書・自己PR文

(ア) 活動内容…就職や進学のための試験対策のため、志望理由書か自己PR文を書くための考察を行った。今まで学校生活全般で学んだことや探究活動で行ったことを志望理由や自己PRに生かすためにはどうすればよいかを考察し、文章にまとめた。

(イ) 活動の実績…生徒は600字の小論文模試にチャレンジし、結果をもとに各々の試験に生かすことができた。

② 探究活動報告書づくり

活動内容…1・2年生で行ってきた探究活動について振り返り、シートに書き込み文章にまとめた。振り返ったことで、改めて地域の課題を考えたり、課題の解決方法を個人の視点と地域の視点から考えたりして、学んだことを今後どう役立てていくべきかを深く考察した。



③ 新聞記事要約による情報整理

(ア) 活動内容…自身の興味がある新聞記事を切り抜きし、その内容を要約して、その記事に対する自分の意見をまとめた。まとめたものをグループ、クラスで発表し、全体で記事の内容を共有した。また、発表者に対して質問し答えることで、お互いに記事の内容を深く考え、知識を深めた。



(イ) 活動の実績…時事問題に関する興味・関心を高め、社会で必要な知識・情報について考えることができた。1・2年の探究活動を通して発掘した自分の中の興味・関心を生かして、記事を選ぶことができた生徒がいた。また、インプットした情報をアウトプットする訓練となり、就職試験や入試の面接などで生かすことができた。

④ 報告書のデータ化

(ア) 活動内容…振り返りのシートにまとめたものを、ワード上でレポートにまとめた。



(イ) 活動の実績…生徒は1、2年生で行った探究活動について、自分なりにまとめることができ、記録に残すことができた。1、2年の探究活動で学んだことが、自己の進路実現や自己の成長、そして今後の自分につながっていると感ずることができた生徒がいた。

(ウ) 実際のレポート

総合レポート

3年組 番

1 活動内容報告

1年生のときには、空き家を使って「タイムスリップ店」を開催した。これは、昔遊びを通して子どもと高齢者が交流することで三国町を明るくすることを目的としていた。私は、来てくださったお客さんがより多くの昔遊びの道具に触れてもらうために一つの遊びごとにスタンプを用意して、スタンプが集まった人に手土産を配るための準備を担当した。また、2年生のときには、1年生で行ったことを活かし、再び空き家の利用法をプレゼンした。そこで提案したのは、空き家を三国祭の遊びの練習場、休憩所として利用する方法だった。そこで、私はプレゼンを作成するときに重要なポイントを絞って伝わりやすいプレゼンを作った。

2 活動から得た課題

1年生のときは、私たち学生が企画し、開催したものだったため、一日しか開催できなかった。そのため、三国町の空き家が増えているという三国町の課題を持続的に解決することができていなかった。さらに、お客さんから店員の接客がよくないとの指摘を受けた。また、2年生のときは、三国町の現状を知るためのフィールドワークの際に、空き家が想像以上にたくさんあることがわかり、すべての空き家を把握することが難しいことがわかった。

3 課題解決のための考察

1年生のときは、個人としては、イベントを自分たちが楽しむばかりで、お客さんへのおもてなしが十分にできていなかったため、店員の接客やお店の雰囲気がたくさんのお客さんが継続的に来てくださるきっかけにはないかと考えた。地域としては、企画の宣伝が三国町全体に広まっていなかった。しかし、三国町は人と人とのつながりが特に強いと感じているので、近くに住んでいる人同士で会話を通して宣伝できると良いと考える。2年生のときは、個人として、もっとフィールドワークをして地域の現状を知ることが必要だと感じた。地域としては、ご近所同士や公的な機関と協力して空き家を増やさないことや空き家の把握をすることが必要だと感じた。

4 まとめ

1年生のときに「タイムスリップ店」を開催したことで、昔遊びという簡単なことで小さな子と高齢者とがつながることができることがわかった。また、2年生のときに自分たちで三国町の現状を正確に知り、そこから人々が生活のしづらさや、不安に感じていることを見たり聞いたりし、そこから課題を明確に示し、課題も壮大なテーマを掲げるのではなく、小さな課題を設定し解決策を提案することが、大きな課題を解決するための一歩になることを学べた。このことは社会福祉学科の推薦入試の際に、UDCSなどで三国町の現状を聞きに行き、社会福祉全体の問題を考えるのではなく、高齢者福祉にテーマを絞り、誰でも簡単にできるレクリエーションを開催する機会を増やし、小さい子と高齢者とが交流することが認知症予防に繋がるのではないかと提案することができたことにつながった。

5 今後に向けて

私は、大学で地域福祉について学び、近年増えている独居老人の問題を解決したいと考えているので、2年生のときに行った、自分で地域に赴き、課題を見つけて、色々な機関と協力して課題を解決することを活かし、坂井市を活性化させるきっかけを自らつくっていきたい。今、コロナ禍で人と関わる機会が激減している。このことは、高齢者の認知症の進行を早めるという研究結果も出ているため、できる範囲で人と関わる機会をつくるのが大切だと考えている。

(5) 事業の総括

この学年は、三国高校が現在行っている探究活動の初年度を経験してきた学年である。「空き家プロジェクト」、「高校生議会」など、走りながら考えて実施してきた。そのため、それぞれの活動が生徒自身の成長にどうつながっているか、生徒自身が成長を実感できているか、学年をまたいだ活動のつながりはどうかなど、教員側は実感が持てずにいた。しかし、生徒の探究レポートからは、探究活動の反省にとどまらず、間違いなく自分の成長を実感し、自身の進路や生き方につながり、地域を愛する気持ちも養われていることが分かる。

また、クラスによっては、3年生1学期の臨時休校期間中に、自身の興味・関心や進路希望に基づく探究活動を、個人で行うことができた生徒がいた。ここには、1、2年生で行ってきた探究活動の経験が生かされている。

荒削りな活動ではあったが、最終的にはそれぞれの活動が、自己の在り方生き方を考えることや、生きる資質能力の育成に生かされた生徒もいたように感じる。

課題としては、生徒たち自身が挙げているように、「空き家プロジェクト」を年に1日限りのものとせず、持続可能な、計画－実施－改善のサイクルを回せるものにすることが挙げられる。また、2年生のときの「高校生議会」を提言で終わらせることなく、自分たちで実際に実施したものを報告する形にし、さらに、地域の課題を自分事としていくことが挙げられる。他にも、後輩への活動内容やその課題の引き継ぎ、ループリックの作成などが挙げられる。